

令和六年度入学試験問題

国 語 (人文学部・教育学部・経済科学部・医学部・創生学部)

注意事項

- 一 この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはならない。
- 二 問題冊子は、全部で二十四ページある。(冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合は申し出ること。)問題冊子の中に下書き用紙が一枚入っている。
- 三 受験する学部によって選択する問題が異なるので、左の表を見て、○印で指定された問題を解答すること。なお、問題ごとに学部の別が記してある。

問題(ページ)	学 部				
第一問(一～八ページ)		○		○	○
第二問(九～十二ページ)		○	○		○
第三問(十三～十六ページ)		○			
第四問(十七～二十四ページ)	○		○	○	○

- 四 解答用紙は、問題冊子とは別になっている。人文学部・教育学部は三枚、経済科学部・医学部・創生学部は二枚である。
解答は、すべて解答用紙の指定された箇所に記入すること。
- 五 受験番号は、各解答用紙の指定された二箇所に必ず記入すること。
- 六 解答時間は、九十分である。
- 七 問題冊子及び下書き用紙は、持ち帰ること。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

歴史叙述の特質について語る前に、それが「時間」の制約を受けざるをえないことをまず指摘しておこう。つまり歴史叙述は、基本的に古い時代(時間)から新しい時代(時間)に向けて記述していくことで、はじめて十分了解される、ということである。因果関係を記述するためには、そのような方向性が必須であるからというだけではなくて、状況や構造が出来事のボタ^①になったり、意味をカク^②テイするコンテキストになつたりするという場合にも、状況や構造が先に前提にないと、言い換えれば背景の中に出来事を描き込むような順番でないと、その叙述は理解し難いものになるからでもある。記述にいたる前に、適切な理解や因果の説明のため、頭の中で幾度も前進と遡及を繰り返すことはあるが、記述自体は古いものから順に新しいものへ、が基本である。

それはおそらく「時間的存在」としての人間のあり方がそうさせるのであろう。人間にとって、生きるとは、とりもなおさず時間に従って身体的・精神的に過^③ごすことだし、過去を思い出し反省し今に生かす、その過去をカ^③テに今を生き、そして未来を待望する人間の思考のベクトルは、当然、過去から現在、そして未来へと向かおう。そうしてはじめて「生きられる時間」(ミンコフスキー)の感覚が得られるからである。時間的な経過においてはじめて歴史的意味が浮上するのである。その生きられる時間というのは、時計のような物理的時間でも、逆に内的・心理的な主観的時間でもなく、生活行動の時間、内的にして外的、主観的にして客観的な時間であり、それがそのまま歴史的時間となつているのである。

だがこの時間の一方通行の線は、単線ではなく複線・多線であることに注意しよう。日常生活のある時点での共時態は、多くの通時態の集合体の横断面であり、それら通時態はさまざまな変化速度で動く諸構造を含んでおり、それが共時態の布置に差異を生みだしていくのである。

主体としての自己がさまざまな転変に見舞われながらも、その人生における一貫性（ストーリー）を手に入れる手段こそ、歴史的思考である。「あなたは一体誰？ どんな人？」と尋ねられ、答え進めていけば、かならず自分の来歴・歴史を語ることになる。うし、家族、学校、職場など、さまざまなレベルでの社会との繋がりも、歴史的な語りの中で表明され、確認されていこう。履歴書や身上書はその公的なエッセンスである。そしてそうした歴史的思考は、反対方向、未来にも投射されて、その「期待の地平」の中で、自己イメージが創られていこう。一方、人には誰でも先祖がおり、（多くの場合）子孫がいる。誰でも歳を取っていき、世代は必ず交替していく。これが歴史の変化を可能にし出来事をもたらす。すなわち時間の直中ただなかにおかれている歴史は時間的に開かれていて、前から来て後続の世界にバトンタッチしていくのである。

ゆえに私の人生の歴史（物語）はゼロから始める必要はなく、すでにある家庭、言語、文化、社会、伝統、要するに歴史じりんに馴致できる。人生の初めも終わりも個人を超えた諸関係の伝統の中に絡め取られ、あらかじめ組み込まれている。鎖や網目のように、前後左右・垂直水平に絡め取られている。小さくはかない人生でも、世代・民族・文化の連関、世界大の文明の連関の中にある。

こうした人間Aの人生の物語の歴史的思考があるから、それが配置され接合する社会・共同体の物語にも、川の流れのように上流から下流へと切れ目なく流れていく「時間」のなぞり、おなじ自己構成の物語形式があると考えると、人は納得できるのである。人生の歴史物語が、時間的存在である人間をハタン④なく生かしているように、社会の歴史（物語）も、実践的機能を発揮する。それは共同体を一つにまとめ、一体性を与える。イデオロギイ的なものにもなりがちだし、政治家はそのようなイデオロギイ的物語を宣揚することもあるが、歴史家には、その時代との対話の中で最適な物語を同時代の読者たちに提示する、という社会的ないし倫理的責務がある。また人生とおなじく、あるいはそれ以上に、社会の歴史には、複線の時系列シエーマが何本も縦断しているから、歴史家は、史料中にそうした複数の時間的継起⑤のチヨウゴウ・印しるしを見出す必要がある。

だが、古い時代から新しい時代へと出来事を順に追っていくだけが、歴史叙述の手法ではない。歴史家は、「その後

ある。歴史家はその歴史叙述において、記述される出来事の発生したときにはまだ未来に属することに度々言及しながら、その過去の出来事を説明する。さらに進んで、時間を出来事の前後両方向に拡大して、叙述に分け与えることが歴史叙述の特徴であるとも考えられる。どれだけ前後に伸ばせるか、しかもそれを十分意義深く理解可能な形で語れるか、その成否は、歴史家の資質と能力に懸かっている。いずれにせよ、歴史叙述にはそうした時間の拡張や行き来が許されている。

これも、私たち人間が、日々の生活で時間を過去・未来・現在と行き来させていることの応用である。たえず過去への遡及とそこからの回帰を心の中で繰り返しながら、今日を生きている、私たちの日常の生き様と時間との関係は、社会の理解と意味づけにも当てはまる。次節で解説するL・O・ミンクという哲学者の言う歴史の「統合形象的理解」においては、そもそも終わりは始まりの約束と結合し、始まりは終わりの約束と結合する。そして時代を振り返ったときの関連の必然性は、将来を見渡したときの関連の偶然性を打ち消すのである。時間的な連続性の理解とは、それを一度に両方の方向から考えることを意味し、^Bそのとき時間はもはや私たちを運んでくる川ではなく、上流と下流を一度に見渡せる航空写真に写った川となるのだ。

しかも一人の人間がさまざまな時間(実存的生活時間、世代の時間、出来事的时间、政治的・制度的時間、経済・景況的時間、神話的・シユクサイ的時間、自然的(昼夜、季節)時間、宇宙的時間など)を生きて、そのイメージや痕跡・記憶をよみがえ甦らせるように、社会的時間についても社会集団や社会階級ごとに種類や継続の長さが異なるものがあるし、それら集団・階級の多様な時間をヒエラルキーの中に統合させようとする「包括社会」^⑦(ハウケン社会、都市社会、絶対主義／重商主義社会、自由主義／資本主義社会、全体主義社会……)の時間もある。

歴史家が行っているのは、そうした出来事や状況と一体化した、また柔軟でさまざまなスケールの集団的時間を歴史の中にも見つけ、あるいは構築して、前後に行き来しながら、多様な時間の進展リズム(長短・遅速・規則不規則……)の相互作用を見つめつつ、もろもろの現象をコンテクストに位置づけ、ヒエラルキー化することだろう。そこに、時代の豊かさ、厚み、深さが現出して、おのずと「時代区分」^⑧の際立ったリンクとなる。

そもそも歴史叙述の特質とは何だろうか。先に見たように、歴史叙述は「物語」の一種であることはたしかだが、その物語法と叙述法は、他の文字ジャンルと何が本質的に違うのか。すでに外部との関係が重要であることは言及しておいた。それを敷衍ふえんしてさらに考え進めてみよう。

A・ダントのいわゆる「理想的編年史」^cは、時間の中で継起するあらゆる出来事を、前後の他の出来事と関連づけることなく、それが起きたその瞬間にすべて検知して書き記す膨大な編年記・歴史年表で、人の心の内までも見通せる者、ほかならぬ神の視点から書かれている。これは事実上人間には不可能であるばかりか、歴史叙述(物語)ではない。

歴史叙述は理想的編年史とは違い、一種の物語として、それ自体としては無定形な集合体で形式の欠如したものや出来事に、ある特定の形式および一貫性を与え、互いの関係を把握できるようにして意味を生み出し、他者にも理解可能にする営みである。物語が人間の(フィクションではなく)現実の行動や思考、およびその産物に適用され、しかも「時間」の中で原因や結果、目的や手段、条件や主体などの現れを、バラバラの糸を縫より合わせるようにして統一体として形成することを目指すとき、その物語は歴史叙述になる。

この歴史家が自分の考案した物語の中に、目的・手段・状況・予期せぬ結果・行為主体などのさまざまな異質な要素をひっきりめ、また取捨選択しつつ、全体としてまとまりのある統一化されたストーリーに編み上げるといふ理解様式を、ミンクは理論の様式、範疇はんちゆうの様式と対比して、歴史叙述の「統合形象化的」特徴と述べ、叙述の対象となる物事や行為を、ジグソーパズルのピースに喩たとえている。

もう一つ、歴史叙述をする歴史家は、フィクションではなく事実を物語っているのだという誠実な信念を貫くのに加え、自分が書こうとしている叙述内容一つのみの整合性や妥当性を問題とするのではなく、その時代・地域に共同主観的に受け継がれ、たえず積み重なり拡張し、また修正されていく大きな歴史像ないし他のすべての歴史言明・歴史叙述の集合体の内部に、それらと整合的に、新たに書き加えられる歴史叙述がしかるべく位置づけられるように注意しながら書かねばならない。それが一つの作品(テキスト)内での整合性だけに留意すればよいフィクションとの大きな違いである。新しい歴史叙述が加わることで、かな

らずしも先行のものが無意味になるわけではない。それがまったく信用を失うまでは、おなじ出来事の別の角度からの像という位置づけで、それら複数の像の総合が、それぞれの時点における歴史的な事実ということになる。

歴史が書き換えられねばならないのは、過去の出来事の意味が、後続の出来事との関係のネットワークに必然的に組み入れられる——組み入れられなければ、関心も持たれない——ことよって、変化を余儀なくされるからであり、一人の現代歴史家の生涯でも、ロシア革命なり、ベトナム戦争なりの意味は変わり、書き直しが必要になるだろうし、新しい世代の歴史家を次々経ていけば、ますますそうだろう。R・G・コリングウッド（一八八九—一九四三年）はこれについて、皆自分自身とその世代に特有の観点から歴史的出来事を見るので、すべての歴史はその主題についての研究の現在にいたるまでになされた「中間報告」と表現し、堀米庸三は「この意味では、歴史の意味とは、不断にみずからを新しくする、しかしつねに未完結の真理ということができよう」と述べる。

これまで述べてきたことが該当するのは、本格的な歴史叙述、通史、伝記といった作品が主たる対象になるが、そもそも歴史研究者でそういったジャンルの作品を書く人は、あまり多くない。むしろ、かぎられたテーマについての論文、より専門性・徹底性の進んだモノグラフが、一人前の歴史研究者としてデビューするのに必須となる。しかし論文、モノグラフであっても、歴史をそじょう組上ありにしているかぎり、基本的におなじ叙述の特質が当てはまる。

たとえばフランスの哲学者P・リクール⑨らは、一見、物語的通史とは正反対のブローデルの『地中海』にも「物語」を見出している。すなわち、地中海のスライと大歴史からの退場、これが潜在的・仮定的な全体的物語の筋だといえる。そこに有名な三つのレベルと三つの時間性（構造Ⅱ地理的時間、周期Ⅱ社会的時間、出来事Ⅱ個別的時間）が働き共存し、相互干渉する中に、いくつもの「準筋立て」が得られるのだ。長期持続は「物語」の敵ではなく事件の連続的展開から派生した事件史の特殊形態で、一種の物語なのだという。そして「地中海」を構成する人間ならざる地理的存在や地勢、都市さらには世紀や諸空間を、あたかも人格のように性格・特徴づけているポリフォニックな物語だとこの作品はみなせるのである。

そのように拡大して考えれば、どんな細かなテーマの専門論文・モノグラフにおいても、潜在的には物語が潜んでいるのだろう。歴史叙述の物語形式（ナラティブ）は、一種の認識装置で、理論・法則では説明できない、不断に変化する出来事の継起を関

係づけ、さまざまな種類の出来事の相互関係全体をまとめあげて、読者に理解できるものにする。歴史叙述の物語性は、歴史の「道筋」「パースペクティブ」をもたらす不可欠の言語的道具であろう。

もう一つ、外部との関係にも関わるが、歴史叙述を離れて、そのもとなつたオリジナルな出来事があるのかというところ、それはそうではない。歴史叙述は、剥がれ落ちたフレスコ画やモザイクを修復するとか、骨や土器の破片を組み合わせて復元するとかいう作業とは、本質的に違う。物語り行為である歴史叙述によつて、はじめてオリジナルが立ち上がってくるのである。歴史上の出来事は、記述よりも先にあつたことはたしかだが、その出来事が、どのようにあつたかは、歴史叙述を離れてはまったくわからない。だから野家啓一の説くように、歴史的出来事は歴史叙述に存在論的に先行するが、歴史叙述は歴史的出来事に認識論的に先行するという¹⁰ジユンカン構造があり、それが歴史認識を根底において特徴づけているのである。

(池上俊一『歴史学の作法』による)

(注)

コンテキスト——一連なりの物事を通じて浮かび上がる関係性や背景情報。文脈、脈絡とも訳される。

共時態——ある特定の時点において複数の物事が造り出す関係性。

通時態——ある物事が、一定の時間を通じて変化していく状態。

シエーマ——図式、概略図、心象など広い意味を持つ語。英語ではスキーマ。

ヒエラルキー——たとえば身分制社会のような、階層性を持った組織構造のこと。

モノグラフ——ある一つの主題について多角的、総合的な研究を行った成果をまとめた報告書、単行本のこと。

ブローデルの『地中海』——フランスの歴史家フェルナン・ブローデルの博士論文『フェリペ二世時代の地中海と地中海時代』(二九四九年初刊)のこと。第一部「環境の役割」で地理・風土などほぼ不変の条件、第二部「集団の運命と全体の動き」で経済・産業・国家体制などの中期的な変化、第三部「出来事、政治、人間」で政局・戦争・個人の運命などの短期的出来事を扱い、重層的に当時の地中海社会の姿を描き出し、歴史学において重視されている研究書。

ポリフォニック——音楽における多声部。比喩的に多層的、重層的な構造を表現する語。
パースペクティブ——ここでは「遠近法を用いて描かれた透視図」の意味。

問一 傍線部①～⑩のカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部A「人間の人生の物語の歴史的思考」とあるが、ここでいう「歴史的思考」とはどのようなものか。本文に即して九十字以内で説明せよ。

問三 傍線部B「そのとき時間はもはや私たちを運んでくる川ではなく、上流と下流を一度に見渡せる航空写真に写った川となるのだ」とあるが、「時間」が「上流と下流を一度に見渡せる航空写真に写った川となる」とはどのようなことか。本文に即して九十字以内で説明せよ。

問四 傍線部C「理想的編年史」について、物語形式の歴史叙述と比較した時、「理想的編年史」に欠けているものは何か。本文に即して九十字以内で説明せよ。

問五 傍線部D「物語り行為である歴史叙述によって、はじめてオリジナルが立ち上がってくるのである」とあるが、ここでいう「オリジナルが立ち上がってくる」とはどういうことか。本文に即して百二十字以内で説明せよ。

第二問は次ページ

第二問 次の文章は、生死不明であった姫君が山里に住んでいるとわかり、姫君を恋慕う男が訪問する場面である。姫君はすでに出家して尼となっていた。読んで、後の問いに答えよ。

妻戸も開きて、いまだ人の起きたるにやと見ゆれば、茂りたる前栽のもとより伝ひ寄りて、軒ちかき常磐木の所せく広ごりたる下に立ち隠れて見給へば、こなたは仏の御前なるべし。名香の香いと染み深く薫り出でて、ただこの端つかたに行ふ人あるにや、経の巻き返さるる音も忍びやかになつかしく聞こえて、しめじめと物あはれなるに、何となくやがて御涙すすむ心地して、つくづくと見る給へるに、とばかりありて、行ひ果てぬるにや、

「いみじの月の光や」

と、ひとりごちて、簾のつま少し上げつつ、月の顔をつくづくとながめたるかたはら目、昔ながらの面影ふとおぼし出でられ、いみじうあはれなるに、見給へば、月は残りなくさし入りたるに、鈍色、香染めなどにや、袖口なつかしう見えて、額の髪ひたひがみのゆらゆらと削ぎかけられたる、まみのわたりいみじうなまめかしうをかしげにて、かかるしもこそらうたげさまさりて、忍びがたうまもりぬ給へるに、猶とばかりながめ入りて、

里わかぬ雲居の月の影のみや見し世の秋にかはらざるらん

と、忍びやかにひとりごちて、涙ぐみたるさま、いみじうあはれなるに、まめ人もさのみはえ静め給はずやありけん、

ふるさとの月は涙にかきくれてその世ながらの影は見ざりき

とて、ふと寄り給へるに、いとおぼえなく、化け物などいふらん物にこそとむくつけくて、奥さまに引き入り給ふ袖を引き寄せ給ふままに、堰き止めがたき御気色を、さすがそれと見知られ給ふは、いとほづかしう口惜しくおぼえつつ、ひたすらむくつけき物ならばいかげせん、世にある物とも聞かれたてまつりぬるをこそは、憂きことに思ひつつ、いかであらざりけりと聞きな

ほされたてまつらんと、とぎまかうさまにあらまされつるを、逃れがたく見あらはされたてまつりぬると、せんかたなくて涙のみ流れ出でつつ、^E我にもあらぬさまいとあはれなり。

〔『山路の露』による〕

(注)

妻戸——家の端の方にある両開きの板戸。

名香の香——仏前で焚く香。

鈍色、香染め——「鈍色」は濃い鼠色。^{ねずみ}「香染め」は黄味を帯びた薄紅色。ともに仏教関係の衣服、調度などに使用する色。

まみ——目元。

問一 二重傍線部①「おぼし出でられて」・②「聞かれたてまつりぬる」について、例にならって文法的に説明せよ。

〔例〕「入りたる」

入り(ラ行四段動詞「入る」連用形)・たる(完了の助動詞「たり」連体形)

問二 傍線部A「つくづくと見る給へるに」について、その動作主を本文中の言葉から抜き出せ。

問三 傍線部B「行ひ果てぬるにや」を現代語訳せよ。

問四 傍線部C「忍びがたうまもりぬ給へるに」について、誰のどのような様子によるものか。本文に即して六十字以内で述べよ。

問五 傍線部D「ふるさとの月は涙にかきくれてその世ながらの影は見ぎりき」について、「影」は何をたとえたものか。具体的に明らかにしつつ、この和歌の内容を簡潔に述べよ。

問六 傍線部E「我にもあらぬさま」について、そのようになった理由を本文に即して七十字以内で述べよ。

第三問は次ページ

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の関係で、返り点・送りがないを省いたところがある。)

初、孝武世、太祖為_リ舍人、懷珍為_リ直閣、相遇_{ヒテ}早_ク旧_{アリ}。懷珍仮_ニ還_ス青州_ニ。上有_リ白驄馬、鬻_レ人、不_レ可_ク騎_ス。送_{リテ}与_ニ懷珍_ニ別_ル。懷珍報_ニ上_ニ百匹_ヲ絹_ニ。或_レ謂_{ヒテ}懷珍_ニ曰_{ハク}、「蕭君此馬_ヲ不_レ中_ニ騎_{スルニ}。是_ヲ以_テ与_レ君_ニ耳。君報_ニ百匹_ヲ不_レ亦多_ク乎。」懷珍曰_{ハク}、「蕭君局量堂堂_{タリ}。寧_{ケンゾ}応_{ケン}負_ニ人_ノ此絹_ニ。吾方_ニ欲_ス以_テ身_ヲ名_ヲ託_セ之_ニ。豈計_ニ錢物多少_ニ。」

(蕭子顯『南齊書』より)

(注)

孝武——人名。宋の第四代皇帝。劉駿。

太祖——人名。齊の初代皇帝。蕭道成。

舍人——官職名。

直閣——官職名。

懷珍——人名。姓は劉、懷珍は名。

仮還——休暇を得て郷里に帰る。

青州——地名。

白驄馬——白に青黒い毛が混じった馬。あしげの馬。

蕭君——太祖に同じ。

局量——度量。

身名——名声。評判。

問一 傍線部①と④の読みを、送りがなの必要なものはそれも含めて、ひらがなで答えよ。

問二 傍線部A「是以与_レ君耳」を、ひらがなのみを用いて書き下し文に改めよ。

問三 傍線部B「不亦多乎」を、ひらがなのみを用いて書き下し文に改め、現代語訳せよ。

問四 傍線部C「寧_レ応_レ負_ニ人此絹」を、「人」が誰であるか明らかにして現代語訳せよ。

問五 傍線部D「豈計_ニ錢物多少」とはどういうことか。「錢物」の内容に注意しながら具体的に説明せよ。

第四問は次ページ

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

情報通信ツールが普及した社会では、人びとはそれぞれに個人を識別する番号(携帯番号など)やID(LINE IDなど)をもっている。番号やIDと個人が紐付けられることで、私たちは、「意中の人」に直接アクセスできるようになった。このような条件のもと、かなり早い段階で可視化されたのが、コミュニケーションの記録^Aである。

携帯電話は普及しだした当初から、個々人の番号やIDを名前に紐付けて登録し、発信履歴、着信履歴という形で、私たちがいつ誰にアクセスし、いつ誰からアクセスされたか記録する機能をもっていた。この機能があることで、距離の離れた相手とのコミュニケーションの行き違いはかなり減少した。

コミュニケーションの記録は、連絡の交通整理だけでなく、承認の目安としても機能した。たとえば、AさんがBさんに電話をし、Bさんが電話に出なかった状況を想定してみよう。

携帯電話は、発信した側、着信した側双方に、「履歴」という形で何月何日何時何分に何回電話した(電話を受けた)という記録を残している。この機能を使えば、AさんはBさんが着信を受けてからどのくらいの時間で返信をしてくるのか正確に知ることができる。

この時間が長くなると、AさんはBさんから受け入れられていないのではないかと疑いを抱くかもしれない。ゆえに、Bさんには、「連絡をもらったのだから返信しなくては」という拘束力が発生する。

ここでもかりにBさんが返信をせず、電話に出ることもせず、Aさんが複数回電話をかけたならば、Aさんは非常に明快な形で、Bさんから拒絶されていることを認識する。コミュニケーションの記録は、私たちが「友だちと想定している他者」から連絡を得られたか否か明示することで、二人のつながりの深度を視覚的に明らかにしてしまうのである。

コミュニケーションの記録は、より大きな社会からの受容の目安にもなる。私たちは、自らのスマホを見返せば、一定の期日に、何人の人から何回の連絡があったのか、知ることができる。裏返すと、どれほど連絡がなかったのかも知ることができるのである。

二〇二一年一二月に大阪・北新地の雑居ビルで放火殺人事件が発生した。多くの犠牲者とともに死亡した容疑者のスマホに登録されていた電話番号は0件であった。「死ぬときくらい注目されたい」と検索して犯行におよんだ容疑者の孤立状況が推察される。

「どこにいてもつながりに捕捉される社会」で、誰からも捕捉されない状況は、私たちに誰からも見向きもされていないという感覚を呼び起こさせるのである。

コミュニケーションアプリ・LINEの登場により、目の前にいない人とのやり取りは、より鮮明に可視化された。

LINEは、韓国NHN株式会社傘下の日本法人、NHN Japan(現、LINE株式会社)が開発したコミュニケーションのソフトである。日本では、二〇一二年頃から利用されだし、二〇一九年には八六・九%の人が利用している(総務省『通信利用動向調査』)。なかでも若者の利用率は非常に高く、二〇代で九五・七%、三〇代で九四・九%とほぼすべての人が利用している。

このLINEのおもな機能がメッセージサービスである。LINEは二者間、あるいは三者以上のグループによるメッセージのやり取りを画面上で一括管理している。

LINEは、いつ、誰にメッセージを発信し、また、いつ、誰からメッセージを受信したのかすぐにわかる仕組みになっている。つまり、私たちのコミュニケーションの履歴を非常にわかりやすい形で示しているのである。

さらに、LINEには、自らの発したメッセージを相手を読んだか否か確認できる「既読」機能もついている。「既読」機能により、人びとは自ら発信したメッセージを相手を読んだのか否か、読んだとすればどのくらいのタイピングで返信をくれるのか、

確認できるようになった。

コミュニケーションアプリに「既読」機能が追加されたことで、メッセージを発信した当事者の「相手がメッセージを読んだのか」という疑問や不安は取り除かれた。しかし、新しい機能は別の不安を生み出してしまう。いわゆる「未読スルー」「既読スルー」問題である。

コミュニケーションアプリをつうじてメッセージを送信する人は、基本的には、相手に読んでもらうことを想定してメッセージを発信している。そうでなければ、メッセージを送る意味はないからだ。そこで「既読」がつかなければ、送信者は相手がメッセージを読んでくれないことに対する不満感や不安感を募らせてゆく。

その一方で、「既読」がついたにもかかわらず、返信がない場合、送信者は「自らのメッセージが届いたにもかかわらず無視された」と解釈し、いっそうの不満感、不安感を募らせてゆく。

おたがいのやり取りが可視化されたことで、メッセージを発信した人は、相手の返信にとらわれるようになり、メッセージを受信した人は、返信の義務を課されるようになる。情報通信端末によって可視化されたコミュニケーションは、不安定な人間関係を生きる私たちが、つながりの状況を判断する目安になっているのである。

可視化されているのは、メッセージの授受だけではない。今や、おたがいの位置情報、ある場所での滞在時間、端末の電池残量、移動速度まで共有するアプリも登場している。

フランスのZenly社が二〇一五年に開発したZenlyというアプリがある。日本では、二〇一九年頃から女子高生を中心に広まった。このアプリを使えば、相手が現在どこにいて、ある場所にどのくらいの時間滞在しているのか、登録されている人のスマホの電池残量はどのくらいなのか、知ることができる。

もちろん、通知をオフにすることも可能だ。しかし、通知をオフにしまうと、かえって周囲の人から疑いを抱かれることもある。それも当然だろう。一度明らかにしたものを隠そうとすれば、そこに不信感を抱く人がいるのは何らおかしいことでは

ない。

高校生の間では、Z e n l yをスマホに入れ、交遊するのがはやっていっているという。おたがいの情報を丸裸にするアプリを積極的に入れようという考えは、にわかには信じがたい。今の若い人の関係をつなぎ止めようという気持ちは、これほどまでに強いのである。

コミュニケーションが可視化されるなかで、遠くにいる人びとと常につながり続ける状況は、私たちの孤独感をあおり立てる。たとえば、若者研究では、携帯メールを頻繁に利用する人ほど、孤独に対して恐怖を抱き、孤独に耐える力が弱くなる、と言われている。

メールやLINEなどのコミュニケーション・ツールが人びとの孤独への恐怖をおおる仕組みについて、社会学の相対的剥奪^{はくたつ}という概念を使って考えてみよう。

相対的剥奪とは、人びとの不満は、主観的な期待水準と実際に達成されたものとの格差(剥奪)により相対的に決定されるという考え方である。たとえば、偏差値七〇のAさんと、偏差値五〇のBさんが中堅レベルのX大学に合格し、入学したとしよう。相対的剥奪の理論にしたがえば、このとき二人が感じる喜びは、AさんよりもBさんのほうが大きくなる。というのも、もともと偏差値の高いAさんは、進学先への期待水準が高くなるため、中堅レベルのX大学への入学という成果をあまり喜べないからだ。

一方、あまり偏差値の高くないBさんは、進学先への期待も高くはない。そのため、X大学に入学するにあたっての剥奪感はなく、満足して入学式を迎えることができる。

この概念をもとに、つながりにおける「常時接続前」と「常時接続後」の時代を比べてみよう。

つながり不安定化してゆくと、人びとは相手をつなぎ止められるか否かという不安を抱えるようになる。このような状況で登場した「常時接続」のつながりの場合は、「自由からの逃走」の経路となるばかりでなく、人びとのつながりへの期待を拡大させ

る。

ケータイ、スマホの登場により、これまで私たちを隔てていた物理的な距離は無視しうるものとなった。私たちは、いつでも、どこでも意中の相手とつながる環境を手に入れたのである。しかし、膨らんだ期待は、それがかなわなかったときの失望感も増幅させる。言い換えると、「つながらないこと」に対する耐久力を大幅に落としてしまう。

たとえば、友だち、またはつきあっている人とつながらない状況を考えてみよう。「常時接続前」の時代であれば、距離の隔たった相手と「つながること」は当たり前ではないので、つながっていない状況に対する不満や不安は、そう簡単には生じない。手紙の時代であっても、相手の返信にやきもきすることはあつたようだが、一日、二日連絡が来ないことは、それほど気にならなかつただろう。そもそも、手紙の時代にはそれほど短期間で連絡をとる手段もなかつた。

「常時接続」の時代になると、相手と「つながること」が常態になる。人びとが相手とつながることを当然と考えているならば、かりに、目の前にいない誰かとつながらない事態が生じると、その状況に対して強い不満や不安を抱くようになる。

しかも、「常時接続」の時代のコミュニケーションは可視化されているので、私たちはどのくらいの時間相手とつながっていないのか、相手がメッセージを確認してくれたのか、つねに意識させられる。「常時接続」の社会は、人びとから誰かとつながらないことへの耐性を奪ってゆくのである。

コミュニケーション・ツールから切断された数十分後、数時間後には不安・不満を感じる、LINEやInstagramを日に何度もチェックしないと落ち着かない。そういう気持ちを抱いている人たちはけっして少なくないだろう。

湿らせてもすぐに乾いてしまう砂のように、私たちのつながりの欲求は満たされることを知らない。すぐに訪れる乾きは、私たちがケータイ、スマホへとしばりつけてゆくのである。

友人関係は、究極的にはおたがいが相手を求め合うという感情に規定されている。友情に、何かの役に立ちそうだとか、仕事上のつきあいがあるからといった感情以外の要素が入ると、当該の友情はなんとなく嘘うそくさいものになる。

個々人が相手に抱く感情が重視される人間関係とは、「相手に受け入れてもらう」ことが重視される人間関係とも言い換えられる。こちらからはたつきかけなければ置き去りにされてしまうような社会を生きる私たちは、相手に受け入れられて「よい」友人関係を維持しなければ、つながりから放り出されてしまう可能性があるのだ。

しかし、何をやれば相手に受け入れてもらえるのか、ということとはそう簡単にはわからない。だからこそ、人びとは対立を回避し、なるべく悪い感情を抱かれないように行動するのである。

情報通信端末を介したコミュニケーションは、一連の機能をつうじて、相手からの承認の度合いを徐々に可視化していった。コミュニケーションの記録は、承認の確認装置の役割も果たしている。

他者からのメッセージの受信量、自らが発信したメッセージに対する応答の量および速さは、それだけで、人から「受け入れられている」度合いを判断する材料になる。この承認の度合いを非常にわかりやすい形で可視化したのが、多くのSNSに実装された、人びとの投稿を評価・拡散する機能である。

Twitter、Facebook、Instagramに代表されるSNSには、いずれも、当該ソフトを介してつながっている人たちに、文字、画像、動画をつうじてメッセージを伝達する機能がある。

メッセージを受信した人は、掲載されたメッセージを「よい」と思えば、ボタンを操作して、自らの気持ちを伝えることができる。俗に言う「いいね」機能である。また、メッセージをより多くの人と共有すべきと感じたならば、シェア機能をつうじてさらに拡散することもできる。

一方、メッセージを送った人は、「いいね」の数やシェアされた回数を自らのSNSのページから確認できる。この「いいね」やシェアの回数を確認することにより、私たちは自ら発信したものが、親しい人あるいは世のなかにどのくらい受け入れられているのか、容易に確認できるようになった。

情報通信ツールに実装された承認の測定機能は、私たちをSNSのページに釘付けにし、^c新たな行為様式を確立していった。

おたがいが受け入れ合うことで成り立つ関係性の難しさは、そもそも、自らが受け入れられているかどうか確認しがたいことにある。この点に加え、「受け入れられる」という行為には、もうひとつ重要な特徴がある。承認そのものが持続性に欠けることである。

かりに、現在受け入れられている人が、数日後にも受け入れられるとはかぎらない。今や「修復をする機会がなさそう」だからケン力をしないのが友人関係のあり方なのだ。だからこそ人びとは、コミュニケーションを繰り返して相互に受け入れられている感覚を更新しなければならない。

SNSの承認測定機能は、承認における可視化の問題を解消した。その一方で、持続性の問題は解消されないまま残っている。| かりにある投稿で一万件の「いいね」を獲得したとしても、次の投稿で同じくらいの「いいね」を獲得できる保証はどこにもない。

その結果、SNSをつうじて承認を得ている人びとは、SNSへの投稿を目的として行動をおこすようになる。「いいね」の獲得を目的として、やや過剰に装飾した写真や動画をSNSに投稿する「インスタ映え」や「SNS映え」といった行為はその典型である。承認が可視化された社会を生きる私たちは、いかに多くの「いいね」がもらえるかを意識しながら、ネタ探しのな行動を繰り返してゆくのである。

しかしながら、投稿用のネタがそう長く続くわけではない。また、次の投稿は受け入れられないかもしれないという心理的緊張は、それだけでストレスになる。結果として一部の人はネタ探しに対する疲労をうったえるようになる。

その一方、ネタの継続を志向して過剰な表現に走る人も出てくる。さらに、相手の投稿に「いいね」を押すために定期的にSNSソフトを開く人も現れる。友だちが送った投稿に承認のメッセージ、すなわち、「いいね」を送ることこそが友情の証だからである。

SNSにより可視化された承認は、不安定な関係におびえる人びとをSNSに引きつけてゆく。「常時接続」の時代の、目の前にいない人による拘束は、常時接続前の時代から考えられないくらいに強まっている。

しかも、そこで交わされるコミュニケーションからは、対面の会話で見られる何気ない要素は削減され、メッセージ性の強いものが中心を占めるようになる。つまり、「ふつう」の自己よりも「ちょっと盛った」自己が提示されるのである。

(石田光規『友だち』から自由になる』による)

問一 傍線部A「コミュニケーションの記録」は人びとに何をもたらしたか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問二 傍線部B「つながりにおける「常時接続前」と「常時接続後」の時代」とあるが、二つの時代の違いを著者はどのようにとらえているか。本文に即して百三十字以内で説明せよ。

問三 傍線部C「新たな行為様式」とはどのようなことを指しているのか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問四 傍線部D「持続性の問題は解消されないまま残っている」とあるが、ここで「持続性の問題」とはどのようなことか。本文に即して百字以内で説明せよ。